

伊勢市教育委員会の学力向上に向けた取組

～令和7年度全国学力・学習状況調査の結果を踏まえて～

1 確かな学力と社会を形成する力の育成

これからの日本社会は、将来の予測が困難な複雑で変化の激しいものとなるといわれています。そのような社会で生きる子どもたちには、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱からなる「資質・能力」を総合的にバランスよく育ていく必要があります。また、今後、子どもたちが社会で自立し、他者と協働しながら新たな価値を創造していく力を身に付けるためには、課題の発見と解決に向けて主体的・対話的で深い学びを実現させなければなりません。

そこで、教員が子どもたちの学習における状況を丁寧に把握したり、自ら指導方法を不断に見直し、改善したりしていくことが必要です。そのため以下の事業を通して、幼稚園、小・中学校等が連携し取組を進めることができるよう支援しています。

1 学力の育成

(1) 学力向上推進事業

- ・児童生徒の学習到達度を明らかにし、個に応じたきめ細かな指導に生かすために目標基準準拠検査（CRT）を市内全小中学校で実施しています。
- ・読解力向上を目指し、モデル校を指定しワークシートを活用したプログラムに取り組んでいます。

(2) GIGA スクール構想の推進

- ・1人1台端末等 ICT を活用し、「個別最適な学び」「協働的な学び」を推進し、そのための活用に係る教員研修の実施やコンピュータ等機器の環境整備を進めています。
- ・情報教育推進委員を核に、情報リテラシーや情報モラル等の情報活用能力の育成に向けた取組の充実を図っています。
- ・学校への ICT 機器整備及び iPad の活用を推進するため、ICT 支援員を計画的に派遣し、教員間の情報共有や授業等での活用について充実を図っています。

2 グローバル教育の推進

(1) エンジョイイングリッシュ事業

- ・小学校では、外国語によるコミュニケーション能力の素地や基礎を養うために、ALT との交流を行っています。
- ・中学校では、スピーチコンテストを開催し、授業の成果を発表する場を設けています。
- ・小中学生を対象に、英語検定にチャレンジすることを通して、英語への関心意欲を高めるため、英語検定料の補助を行っています。

(2) ALT 活動事業

- ・小学校では、3、4年生で外国語活動、5、6年生で外国語科が実施され、ALT は、担当教員が行う授業を補助しています。
- ・ALT は小学校1、2年生では、歌やゲームを中心とした外国語の活動や国際理解教育を行っています。また、異文化理解のため、ALT が行事等に参加し、様々な場面で児童と交流できるようにしています。
- ・中学校では、ALT が授業に加わることで、生徒の生きた英語に触れる機会を増やし、授業が実際のコミュニケーション場面の1つとなるようにしています。

3 主体的に社会を形成する力の育成

(1) 児童生徒教育活動支援事業

- ・「豊かな心を育む体験交流活動推進事業」として事業推進校を指定し、自然や環境、文化、ボランティア等に関する体験・交流、創意工夫を生かした活動を行っています。
- ・中学生が助産師や思春期保健相談士からいのちについての講義を聞いたり、赤ちゃんとふれあう機会をもったりして、自分や他者のいのちの大切さを知ること、共感能力や自己肯定感を高める機会を設定しています。

(2) 環境教育の推進

- ・学校や地域の実態に応じた特色ある環境教育・環境保全に関する取組を実施しています。
- ・環境教育出前授業を積極的に活用した実践や、県内の公的機関・ボランティア団体等と連携した環境教育を推進しています。

4 キャリア教育の推進

(1) 未来へチャレンジ！職場体験推進事業

- ・キャリア教育の一環として、中学校2年生において職場体験活動を行っています。将来さまざまな生き方や進路選択の可能性が、等々の学習を通して、生徒の勤労観・職業観を育てています。
- ・地元企業のボランティア（ビジネスパーク伊勢）の協力による出前授業の実施により「地域の子どもは地域で育てる」という気運を高めています。

5 幼児教育の推進

(1) 保幼小の連携

- ・途切れのない支援を充実させるため、保幼小が連携できるように、教育・保育の参観の機会や情報交換の機会を設けています。また、「伊勢市架け橋プログラム」の取組において、子どもの姿や実践を交流し合う機会を設け、それぞれの取組の充実や改善につなげていきます。

(2) 研修講座の実施（乳幼児教育専門講座）

- ・乳幼児教育に係る今日的な課題を研修講座のテーマとして設定し、県内外の専門家を講師に迎え、幼稚園教員、保育士、小中学校教員等とともに実践的な保育を学んでいます。

2 令和7年度全国学力・学習状況調査の伊勢市の結果

1 令和7年度全国学力・学習状況調査について

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査日

令和7年4月17日（木）実施

（中学校理科については、4月14日～17日の内1日でCBTシステムを利用したオンライン方式で実施）

(3) 対象者

市内全小学校の第6学年、全中学校の第3学年で実施

(4) 調査科目

小学校：国語、算数、理科

中学校：国語、数学、理科

(5) 調査内容

① 教科に関する調査

- ・ 出題内容は、下記アとイを一体的に問うもの

ア 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等

イ 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査問題は学習指導要領（小学校調査においては平成29年告示、中学校調査においては平成30年告示）に示された目標及び内容等に基づいて作成。

② 生活習慣や学習環境等に関する調査

- ・ 児童生徒に対する学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

（児童・生徒質問紙）

- ・ 学校に対する指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査

（学校質問紙）

(6) 調査結果についての考え方

- ・ 伊勢市の教育施策・各学校の教育の改善、各児童生徒の全般的な学習状況の改善等につなげることが重要であると考えています。
- ・ 調査により測定できるのは学力の特定の一部であること、学校における教育活動の一側面であることを踏まえ、調査結果を活用しています。

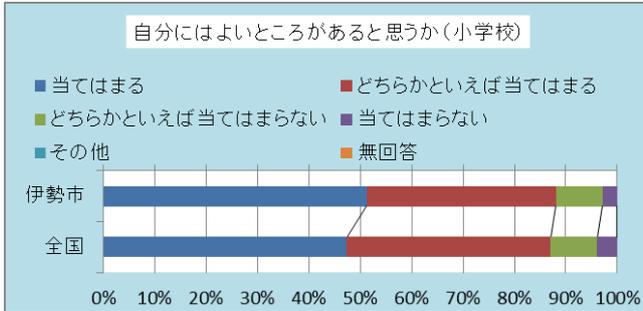
2 学校質問紙・児童生徒質問紙の調査結果

学校質問紙・児童生徒質問紙から伊勢市の学校の様子・子どもの様子を見ていきます。

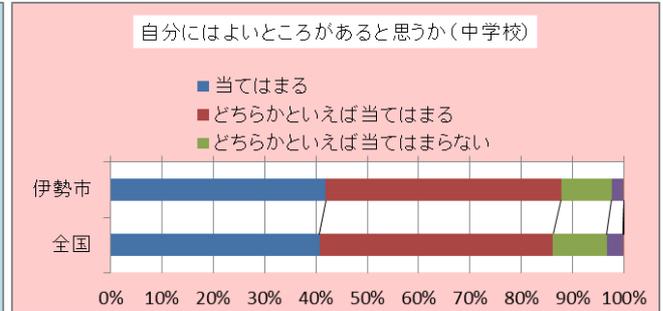
※以下、小学校対象の学校質問紙は（小学校）、中学校対象の学校質問紙は（中学校）、小学生の児童質問紙は（児童）、中学生の生徒質問紙は（生徒）と記載。小学校のグラフの背景は水色、中学校はピンク色で表示しています。

※1%未満は、グラフには記載されていません。

(1) 自己有用感

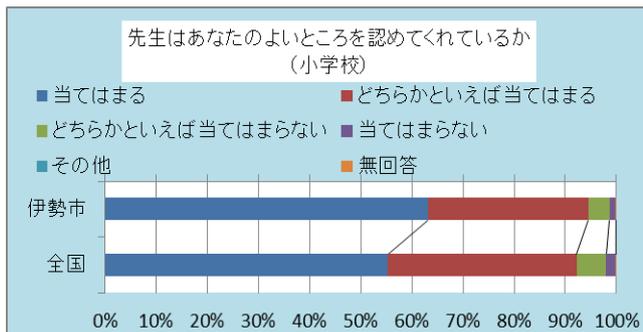


グラフ1 (児童)

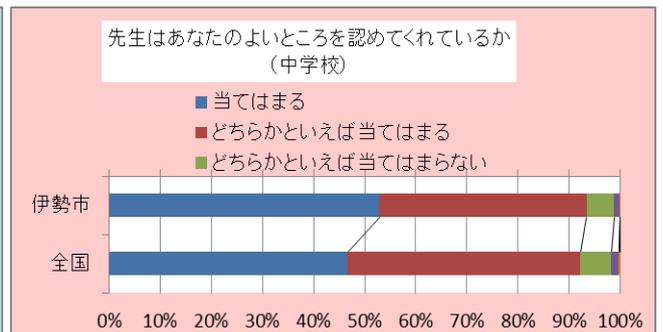


グラフ2 (生徒)

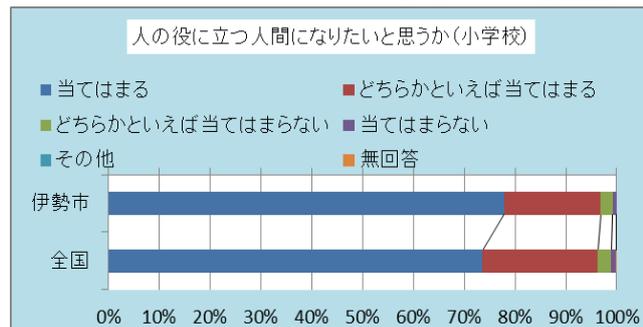
グラフ1・2は「自分にはよいところがあると思うか」を聞いたものです。昨年度、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもの割合は、中学校において全国の割合を下回っていましたが、今年度は小中学校ともに全国の割合を上回っています。



グラフ3 (児童)



グラフ4 (生徒)



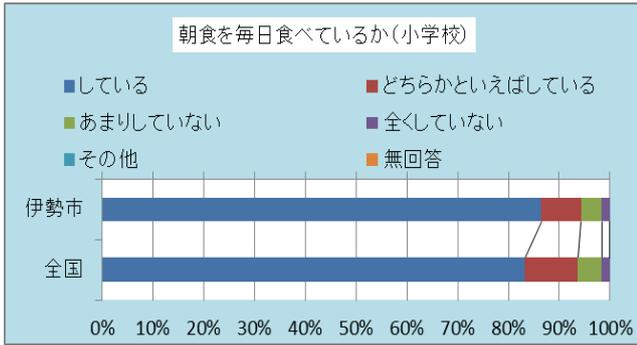
グラフ5 (児童)



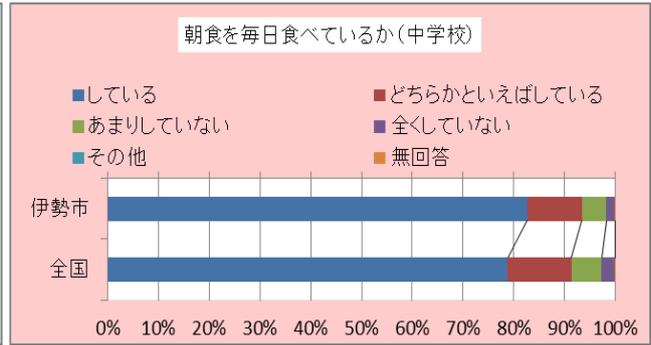
グラフ6 (生徒)

グラフ3・4は「先生はあなたのよいところを認めてくれているか」、グラフ5・6は「人の役に立つ人間になりたいと思うか」を聞いたものです。今年度、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもの割合は、両質問とも、小中学校ともに全国の割合を上回るか、全国と同程度の結果となりました。

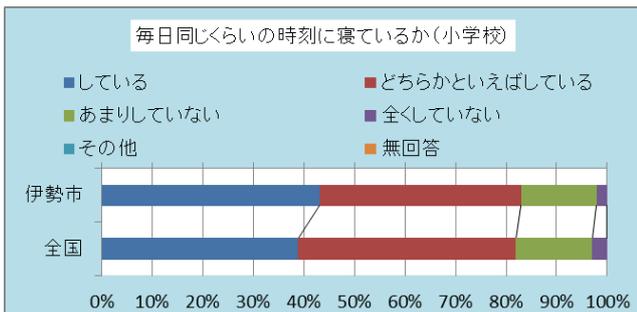
(2) 児童生徒の基本的生活習慣について



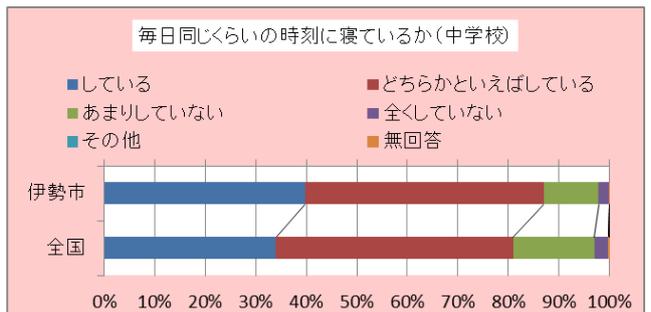
グラフ7 (児童)



グラフ8 (生徒)



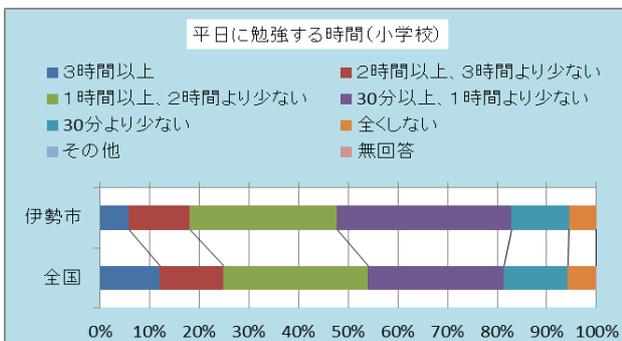
グラフ9 (児童)



グラフ10 (生徒)

グラフ7・8は「朝食を毎日食べているか」、グラフ9・10は「毎日同じくらいの時刻に寝ているか」を聞いたものです。今年度も小・中学校ともに「している」、「どちらかといえばしている」と回答した子どもの割合は、全国の割合を上回っています。

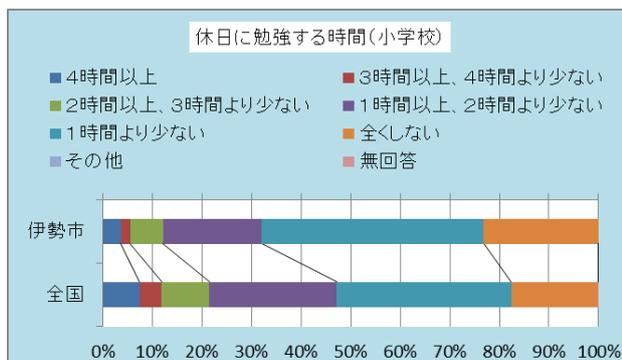
(3) 児童生徒の家庭での学習習慣について



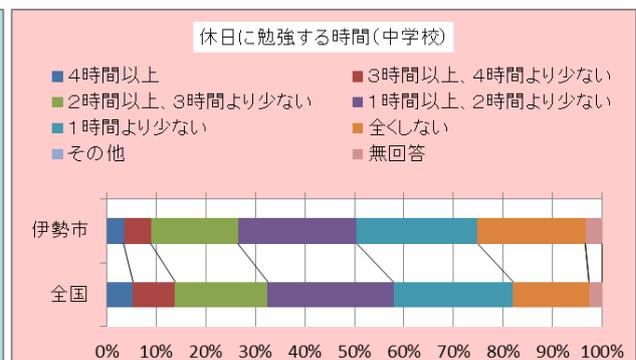
グラフ11 (児童)



グラフ12 (生徒)



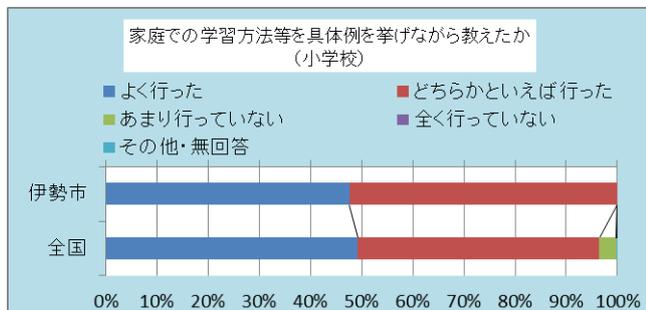
グラフ13 (児童)



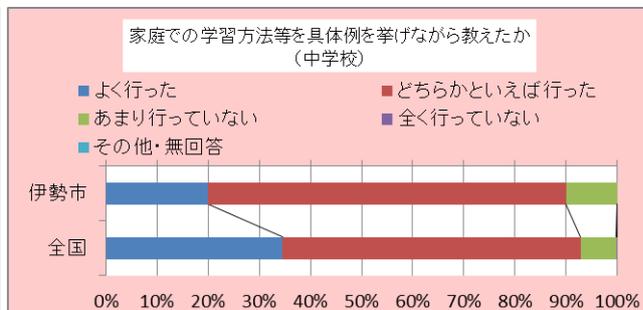
グラフ14 (生徒)

グラフ 11・12 は「平日に勉強する時間」を聞いたものです。伊勢市では、「1時間以上」と回答した子どもの割合は、小学校で全国の割合を下回っています。中学校では、昨年度に引き続き、全国の割合を上回っています。

グラフ 13・14 は「休日に勉強する時間」を聞いたものです。伊勢市では、小・中学校ともに全国の割合を下回っています。

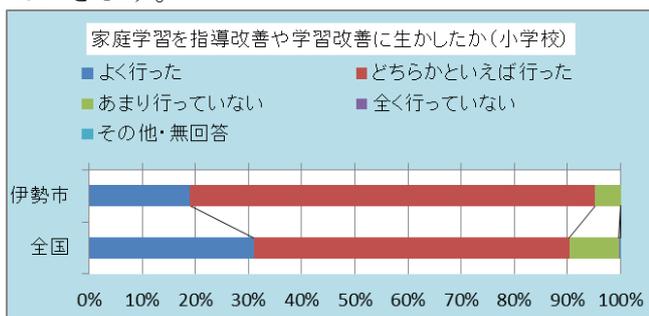


グラフ 15 (小学校)

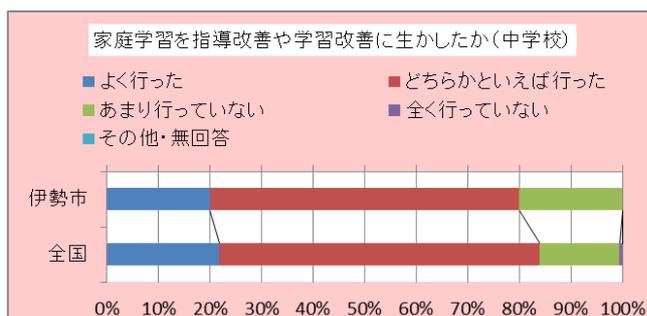


グラフ 16 (中学校)

グラフ 15・16は学校に対して、「家庭での学習方法等について具体例を挙げながら教えたか」を聞いたものです。「よく行った」、「どちらかといえば行った」と回答した割合は、小学校では上回っていましたが、中学校では全国の割合を下回っています。今後も学習の手引き等の取組を進めていきます。

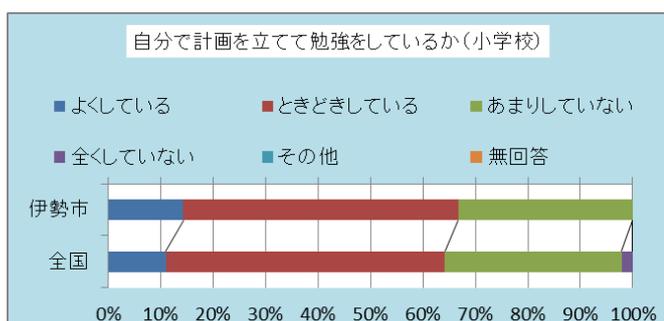


グラフ 17 (小学校)

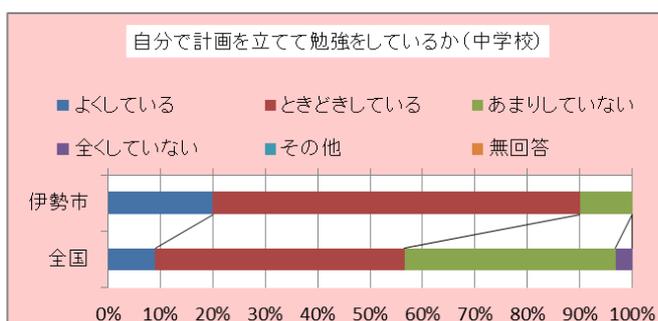


グラフ 18 (中学校)

グラフ 17・18 は学校に対して、「家庭学習を指導改善・学習改善に生かしたか」を聞いたものです。小学校は全国の割合を上回った一方で、中学校は全国の割合を下回っています。



グラフ 19 (小学校)



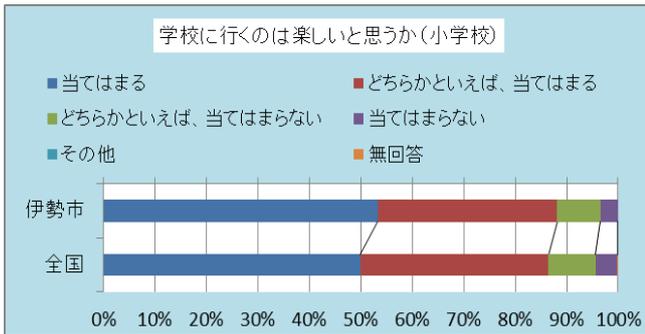
グラフ 20 (中学校)

グラフ 19・20 は「自分で計画を立てて勉強をしているか」を聞いたものです。今年度、小学校では、「よくしている」、「ときどきしている」と回答した割合が全国を上回り、中学校では大きく全国を上回っており、家庭での学習を計画的に実施していることがわかります。

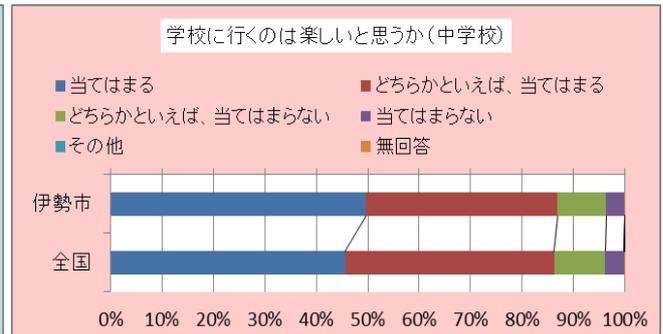
家庭学習については、児童生徒質問紙調査と学校質問紙調査の結果を比較し、各学校において課題を明らかにするとともに、家庭学習の方法について子どもたちに分かりやすく伝え、計画的

にそして自ら学習をすすめる力をつけるために家庭と協力し取組を進めていきます。

(4) 児童生徒の学校生活について

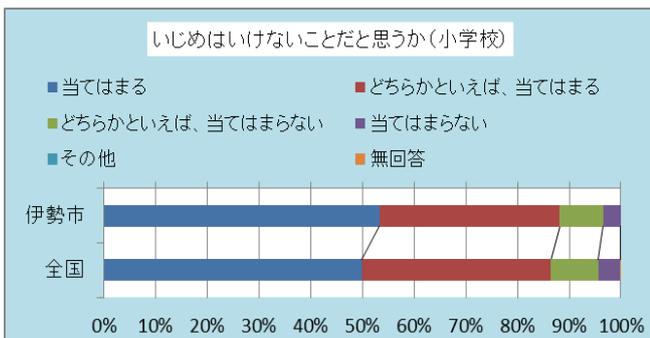


グラフ 21 (児童)

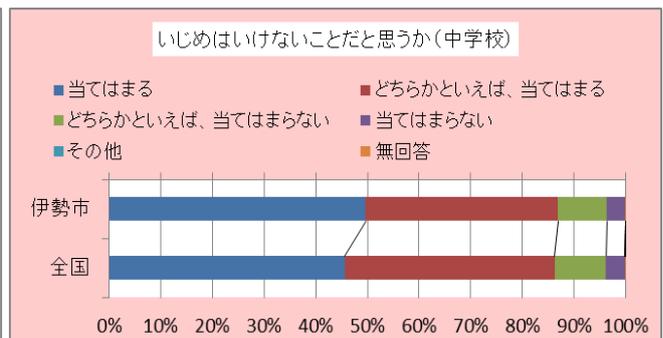


グラフ 22 (生徒)

グラフ 21・22 は「学校に行くのが楽しいと思うか」を聞いたものです。「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と答えた割合は、小中学校ともに全国の割合を上回りました。学校生活への安心感や充実感がある子が多いと考えられますが、肯定的に回答できなかった児童生徒の原因について教育相談等を通じて明らかにし、具体的な改善に取り組む必要があります。



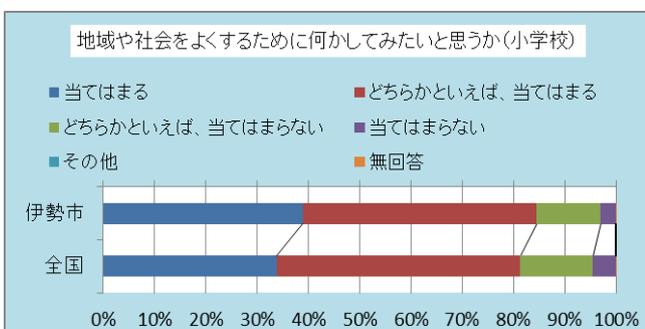
グラフ 23 (児童)



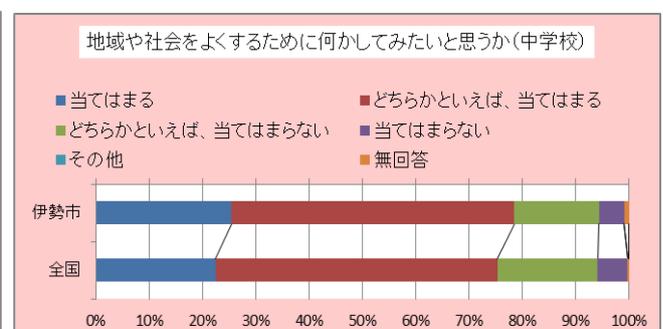
グラフ 24 (生徒)

グラフ 23・24 は「いじめはいけないことだと思うか」を聞いたものです。「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合は、小中学校ともに全国の割合を上回りました。今後も豊かな人間性を育むために、様々な出会いや経験を積み重ねるような教育機会をより一層充実させていきます。

(5) 地域や社会にかかわる活動の状況について



グラフ 25 (児童)



グラフ 26 (生徒)

グラフ 25・26 は「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思うか」を聞いたものです。伊勢市では、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、小中学校と

もに全国の割合を上回っています。

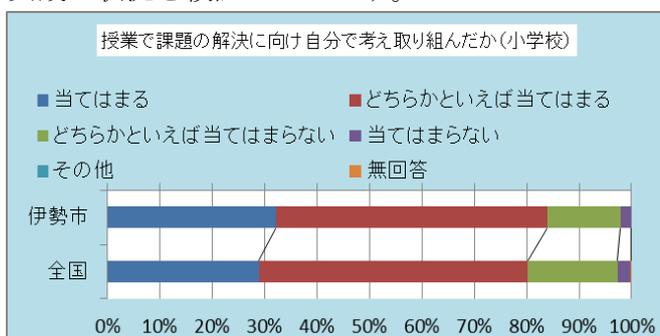
今後も小学校では社会科や生活科、総合的な学習の時間等の学習を通して、中学校でも総合的な学習の時間やその他の学校の活動においてさらに地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養っていく必要があります。

(6) 主体的・対話的で深い学びの視点による学習指導の改善について

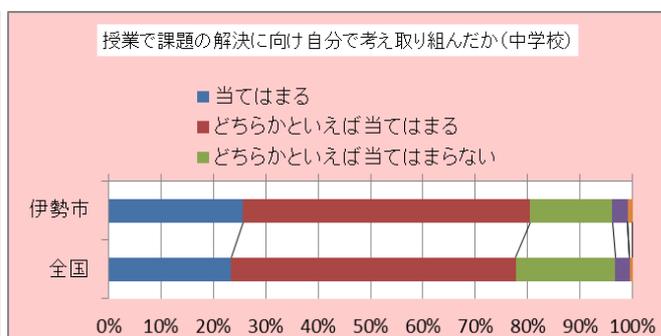
平成29年3月31日に学習指導要領が告示され、小学校では令和2年から、中学校では令和3年度全面実施されました。

現在の学習指導要領では学ぶことに興味や関心をもち、毎時間見通しを持って粘り強く取り組むなどの「主体的な学び」、個人で考えたことを意見交換したり、議論したりすることで新たな考え方に気付いたりするなどの「対話的な学び」、課題の追究、課題の解決を行う探究の過程に取り組むなどの「深い学び」の実現に向けた授業改善が求められています。

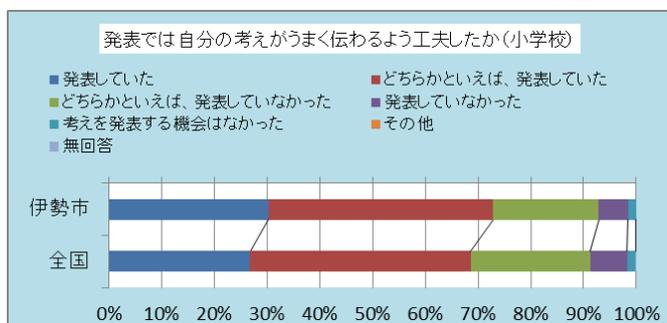
児童生徒質問紙では、以下の質問によって、「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業の実践の状況を検証しています。



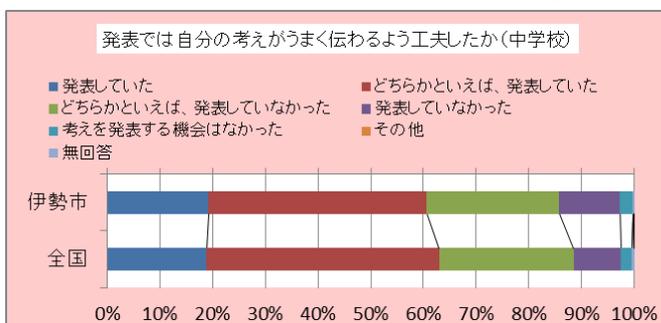
グラフ 27 (児童)



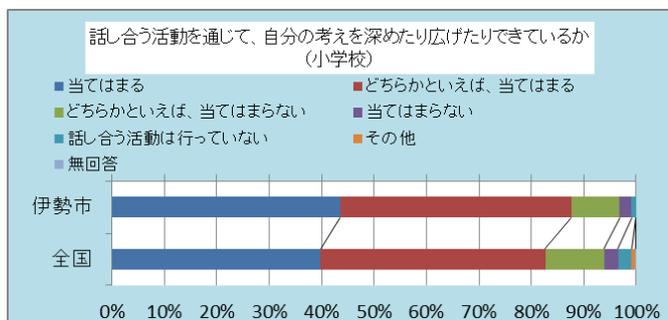
グラフ 28 (生徒)



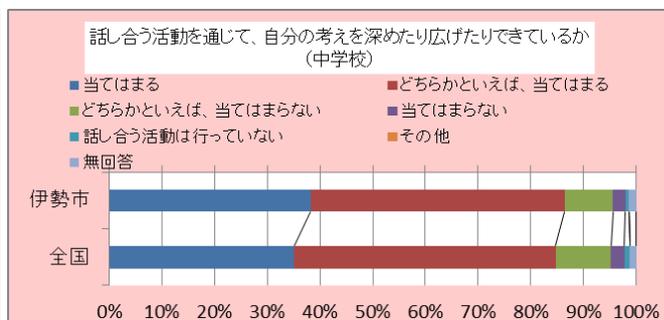
グラフ 29 (児童)



グラフ 30 (生徒)



グラフ 31 (児童)



グラフ 32 (生徒)

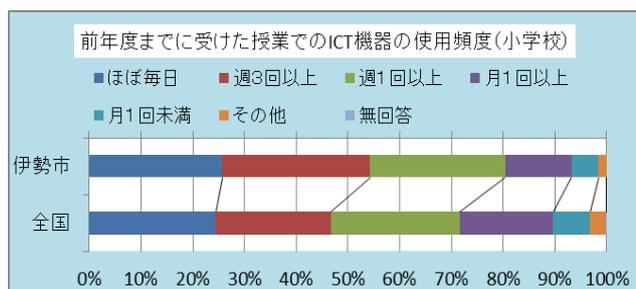
グラフ 27・28 は「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思うか」を聞いたものです。「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、

昨年度に引き続き小中学校とも全国の割合を上回っています。

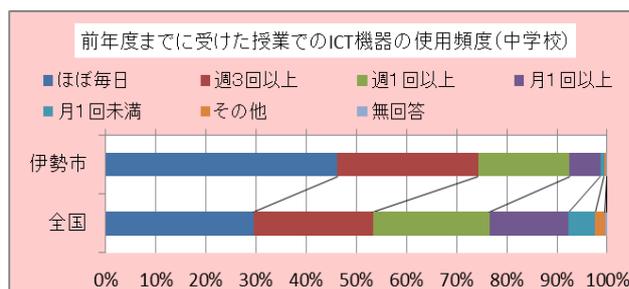
グラフ 29・30 は「授業で、自分の考えを発表す機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立て等を工夫して発表していたと思うか」を、グラフ 31・32 は「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができているか」を聞いたものです。「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、小・中学校ともに全国の割合を上回っていますが、中学校においては「自分の考えを伝えること」に少し課題が見られます。

今後も、児童生徒の困り感や課題に寄り添いながら、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、授業改善に取り組んでいきます。

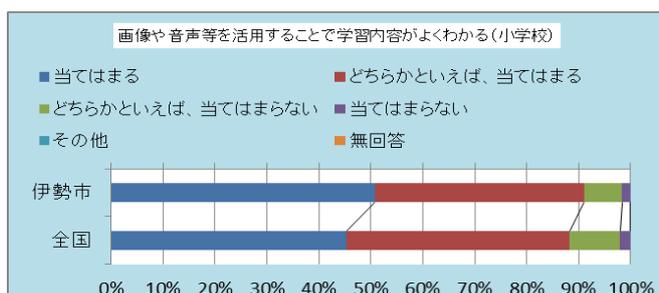
(7) ICT 機器の活用について



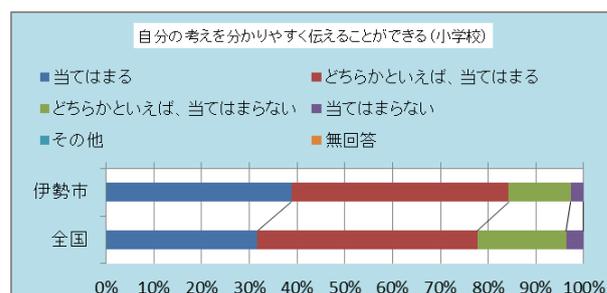
グラフ 33 (児童)



グラフ 34 (生徒)



グラフ 35 (児童)



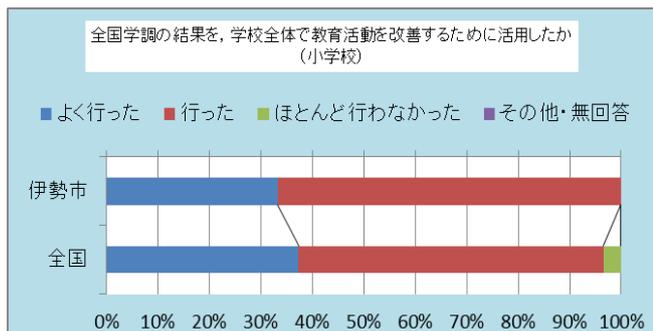
グラフ 36 (児童)

グラフ 33・34 は「前年度までに受けた授業で、コンピュータなどの ICT 機器をどの程度使用したか」を聞いたものです。小・中学校ともに、全国の平均を大きく上回っており、日常的に ICT 機器が活用されていることがわかります。

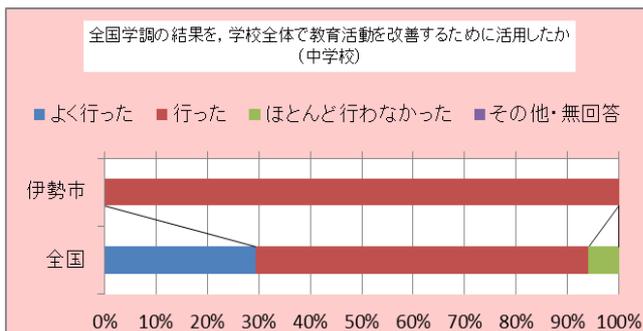
グラフ 35 は「ICT 機器で、画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かったか」グラフ 36 は「ICT 機器で、自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができるか」を聞いたものです。(中学校は今年度質問なし)とも全国の割合を上回っています。

日常的に ICT 機器が活用されていますが、今後は活用の場面を見極め、効果的に ICT 機器が活用されるよう取組を進めていく必要があります。

(8) 全国学力・学習状況調査結果の活用について



グラフ 37 (小学校)



グラフ 38 (中学校)

グラフ 37・38 は「全国学力・学習状況調査の結果を教育活動改善のために活用したか」を、学校に対して聞いたものです。

小・中学校ともに全校が肯定的な回答をしており、全国学力・学習状況調査の結果を子どもたちの現状を把握し、改善のために活用していることがわかります。

今後も、学校の教育活動や学校運営の状況に関する情報を積極的に保護者や地域に提供することで、家庭、地域との連携を深め、子どもたちの確かな学力の育成のために活性化を図っていくことが大切です。

3 教科に関する調査の結果

(1) 各教科の正答の状況

教科に関する調査の平均正答率・正答数は次のとおりです。

令和7年度の教科に関する調査の概要

	小学校調査			中学校調査		
	国語	算数	理科	国語	数学	理科
R7 全国 平均正答数	9.4/14	9.3/16	9.7/17	7.6/14	7.2/15	
R7 全国 平均正答率(%)	66.8	58.0	57.1	54.3	48.3	503
R7 伊勢市 平均正答率概要	全国と ほぼ同じ	全国と ほぼ同じ	全国と ほぼ同じ	全国と ほぼ同じ	全国と ほぼ同じ	全国を 上回っている

※中学校理科は正答率ではなく、IRT スコアで比較しています。

- IRT（項目反応理論）
児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論
- IRT スコア
IRT（項目反応理論）に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すもの

※国語、算数・数学、理科（小学校）の平均正答率は、それぞれの平均正答数を設問数で割った値の百分率（概数）です。

※平均正答率概要については、全国と伊勢市の差異が±3%以内をほぼ同じと表しています。

(2) 各教科の結果概要

※「平均正答数」は児童生徒の正答数の平均です。

※「平均正答率」は平均正答数を百分率で表示しています。

※概要の「各領域の平均正答率の状況」は、文部科学省から提供されたグラフであり、学習指導要領に示されたその教科における各領域の、伊勢市と全国（公立）の平均正答率を表したものです。

※「特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨」に記載の記号の見方

○：正答率が、全国平均よりも3ポイント程度以上高い設問のうち主な設問

▽：正答率が、全国平均よりも3ポイント程度以上低い設問のうち主な設問

※設問ごとの正答率は、それぞれの正答児童生徒数を全体の児童生徒数で割った値の百分率です。

小学校〈国語〉

①概要

小学校〈国語〉	
各領域の平均正答率の状況	<p>Legend: —●— 貴教育委員会 -▲- 三重県（公立） -●- 全国（公立）</p> <p>Categories: (1) 言葉の特徴や使い方に関する事項 (2) 情報の扱い方に関する事項 (3) 我が国の言語文化に関する事項 A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと</p>
課題等	<p>・今回出題された学習内容のうち、「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」、「(2) 情報の扱い方に関する事項」、「C 読むこと」において、全国の平均正答率をやや下回っています。</p>

②特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨

知識及び技能

(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

2四	学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う ▽アこのみ ○イあついで
----	--

思考力、判断力、表現力等

A：話すこと・聞くこと

▽1三(2)	話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる
--------	---------------------------------------

C：読むこと

▽3二(2)	事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができるかどうかをみる
--------	---

小学校〈算数〉

①概要

小学校〈算数〉	
各領域の平均正答率の状況	<p>Legend: —●— 貴教育委員会 -▲- 三重県 (公立) -●- 全国 (公立)</p>
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・今回出題された学習内容のうち、「C 測定」、「C変化と関係」において、全国の平均正答率をやや下回っています。

②特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨

A 数と計算

▽ 3 (1) 小数の加法について、数の相対的な大きさを用いて、共通する単位を捉えることができるかどうかをみる

B 図形

○ 2 (1) 平行四辺形の性質を基に、コンパスを用いて平行四辺形を作図することができるかどうかをみる

C 変化と関係

▽ 4 (1) 伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができるかどうかをみる

D データの活用

○ 1 (3) 簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶことができるかどうかをみる

小学校〈理科〉

① 概要

小学校〈理科〉	
各領域の平均正答率の状況	<p>Legend: —●— 貴教育委員会 -▲- 三重県(公立) -●- 全国(公立)</p>
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・今回出題された学習内容のうち、「『エネルギー』を柱とする領域」、「『生命』を柱とする領域」において、全国の平均正答率をやや下回っています。

② 特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨

A区分 「エネルギー」を柱とする領域

▽2(4) 乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身に付いているかどうかをみる

A区分 「粒子」を柱とする領域

○4(1) 水の温まり方について、問題に対するまとめを導きだす際、解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、表現することができるかどうかをみる

B区分 「生命」を柱とする領域

▽3(3) 発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる

B区分 「地球」を柱とする領域

○1(2) 赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することができるかどうかをみる

中学校〈国語〉

①概要

中学校〈国語〉	
各領域の平均正答率の状況	<p style="text-align: center;">(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項</p> <p style="text-align: center;">100.0 80.0 60.0 40.0 20.0 0.0</p> <p style="text-align: center;">A 話すこと・聞くこと</p> <p style="text-align: center;">B 書くこと</p> <p style="text-align: center;">C 読むこと</p> <p style="text-align: right;"> —●— 貴教育委員会 -▲- 三重県（公立） -●- 全国（公立） </p>
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・今回出題された学習内容のうち、「A話すこと・聞くこと」において、やや全国の平均正答率を下回っています。

②特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨

思考力、判断力、表現力等

A：話すこと・聞くこと

- ▽2二 相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる

B：書くこと

- 4二 読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる。
- ▽1三 書く内容の中心が明確になるように、内容のまとまりを意識して文章の構成や展開を考えることができるかどうかをみる。

C：読むこと

- 3二 文章全体と部分との関係に注意しながら、登場人物の設定の仕方を捉えることができるかどうかをみる。

中学校〈数学〉

①概要

中学校〈数学〉	
各領域の平均正答率の状況	<p>Legend: —●— 貴教育委員会 -▲- 三重県（公立） -●- 全国（公立）</p>
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・今回出題された学習内容のうち、「D データの活用」の領域において、全国の平均正答率をやや下回っています。

②特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨

A 数と式

- ▽1 素数の意味を理解しているかどうかをみる。
- 2 数量を文字を用いた式で表すことができるかどうかをみる。
- ▽6 (1) 事柄が常に成り立つとは限らないことを説明する場面において、反例をあげることができるかどうかをみる。

B 図形

- ▽9 (2) 統合的・発展的に考え、条件を変えた場合について、証明を評価・改善することができるかどうかをみる。
- 9 (3) ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができるかどうかをみる。

D データの活用

- ▽5 相対度数の意味を理解しているかどうかをみる。
- 7 (1) 必ず起こる事柄の確率について理解しているかどうかをみる。

中学校〈理科〉

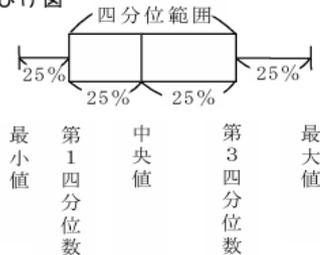
① 概要

小学校〈理科〉	
IRTスコアの分布状況	<div style="text-align: center;"> <p>伊勢市</p> <p>(IRTスコア)</p> </div> <p>※中学校理科は IRT スコアでの測定のため、領域別の正答数分布グラフ等は提供されていません。</p>
課題等	<ul style="list-style-type: none"> IRT スコアの分布状況について箱ひげ図で見ると、伊勢市の状況は箱の位置が全国に比べやや右側に位置し、四分位範囲の広がりも全国と同程度でした。 共通問題の中では、「『粒子』を柱とする領域」の問題が全国の正答率を下回りました。

箱ひげ図とは、データの分布を大まかに把握するためのグラフです。箱（長方形）とひげ（線）を使って、データの最大値・最小値・四分位数を表します。

- 上図の箱の部分には、正答率の順に児童生徒を並べたとき、中央付近の約 50%の児童生徒が、どれくらいの正答率であったかを示します。

・箱ひげ図



四分位数

データを四等分した数で、下から $1/4$ にある数を第1四分位数、中央値を第2四分位数、上から $1/4$ にある数を第3四分位数と表します。

四分位範囲

データの中央付近の約 50%が含まれる区間の大きさ（第3四分位数と第1四分位数の差）を表します。

② 共通問題において特徴的な結果であった設問とその出題の趣旨

「粒子」を柱とする領域

▽ 1 (2) 身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定できるかどうかをみる。

「生命」を柱とする領域

○ 1 (4) 水の中の生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問うことで、生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる。

※今年度、中学校理科はCBT方式で出題され、学校ごとに4日間の日程に分け実施されました。出題された全26問のうち、全日程共通問題が6問、実施日により異なる問題が4問、生徒ごとに異なる問題が16問（非公表）です。

4 課題が見られた設問の指導に当たってのポイント

(1) 小学校国語

① 話し手の考えと比較しながら聞き、自分の考えをまとめる

(対応設問 1 三 (2))

話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめるためには、話し手の考えと自分の考えとを比較して共通点や相違点を整理したり、共感した内容や納得した事例を取り上げたりして、自分の考えをまとめることが大切である。本設問では、小森さんたちが聞いたかった「バスの運転士として大切にしていること」について、インタビューを通して、具体的な内容を岡さんから引き出している。ここでは、小森さんが納得した事例を岡さんに伝えていることを捉えることが求められる。

学習指導に当たっては、自分が知りたい内容に関する言葉を取り上げ、更に質問しながら理解を深め、話し手の考えと比較しながら自分の考えをまとめていけるようにすることが大切である。

② 事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができる

(対応設問 3 二 (2))

要旨とは、書き手が文章で取り上げている内容の中心となる事柄や、書き手の考えの中心となる事柄などである。要旨を把握するためには、文章の各部分だけを取り上げるのではなく、文章全体の構成を捉えることが重要である。本設問では、【資料 3】から、「とても」という言葉が、室町時代は「どうせ」、大正時代より前は「どうしても、とうてい」、今は「非常に」というように、言葉の意味や使われ方が変わってきていることを読み、「時代とともに言葉の意味が変わる」という要旨を捉えることが求められる。

学習指導に当たっては、【木村さんのメモ】のように、書き手がどのような事実を理由や事例として挙げているかを書き出し、書き手の考えを自分の言葉で短くまとめるなどして、内容の中心となる事柄などを捉えることができるよう指導することが必要である。その際、文章の各部分だけを取り上げるのではなく、全体を通してどのように構成されているのかを正確に捉えることができるように指導することが重要である。また、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することの必要性を感じられるように、活動の目的や価値を明確にしておくことが大切である。例えば、対話の中で、友達と考えを伝え合ったり、自分の経験や知識を結び付けて考えたりしながら、文章を読む活動の目的を明確にできるようにすると効果的である。また、第 5 学年及び第 6 学年の【知識及び技能】の(1)カの「話や文章の構成や展開」と関連付けて指導することも有効である。

(2) 小学校算数

① 小数の加法について、数の相対的な大きさを用いて、共通する単位を捉える。(対応設問3(1))

小数の加法について、数の表し方の仕組みや数を構成する単位に着目して数の相対的な大きさについて理解し、既習の整数の加法に帰着できるようにすることが重要である。

指導に当たっては、例えば、本設問を用いて、 $0.4+0.05$ について、どの位の単位に着目すれば、既習の整数の加法に帰着できるのかを考察する活動が考えられる。その際、10分の1の位に着目して0.1の幾つ分かを考えると0.05は整数で表すことができないことから、そのままでは整数の加法に帰着することができないと気付くことができるようにすることが大切である。その上で、100分の1の位に着目して0.01の幾つ分かを考えると、0.05は0.01の5個分、0.4は0.01の40個分とみることができることから、0.01を共通する単位として、 $40+5$ という整数の加法に帰着できることに気付くことができるようにすることが大切である。なお、小数の加法を整数の加法に帰着させることで、異なる位の数を加えるなどの誤りに気付くことができるようにすることも大切である。

② 伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができる。(対応設問4(1))

日常生活の問題を解決するために、ある一つの数量を調べようとするとき、その数量を直接調べにくい場合は、その数量と関係のある他の数量を使って調べられないかと考えて事象を観察し、伴って変わる二つの数量に着目し、必要な数量を見いだすことができるようにすることが重要である。

指導に当たっては、例えば、本設問を用いて、新品のハンドソープが空になるまでに何プッシュすることができるのかを知るために、プッシュの回数に伴って変わる数量に着目し、必要な数量を見いだす活動が考えられる。その際、一方の数量を決めればもう一方の数量がどのように決まるのか、あるいは、一方の数量は他の数量に伴ってどのように変化するのか、という見方で二つの数量の関係を捉えることができるようにすることが大切である。

(3) 小学校理科

①乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身に付いている（対応設問2（4））

ものづくりでできた装置を言葉や図に表現したり、言葉や図から装置を再構成したりするなどして、学習を通して得た知識の理解を深めることが大切である。

ものづくりの活動は、問題解決の活動の一形態である。児童が明確な目的を設定し、その目的を達成するために行う活動であり、指導にあたっては、設定した目的を達成できているかを振り返り、修正するといった活動が大切である。例えば、本問のように「磁石の性質」と「電気の通り道」など複数の内容を生かしたものづくりの活動をする場合は、児童がつくりたいものを構想する前に、それぞれの内容で習得した知識を整理してまとめるとよい。つくったものを動かす、構想したとおりになっているかを振り返り、修正するといったものづくりの活動を通して、知識と知識、知識と具体物とを相互に関係付けて意味を捉えるようにすることで、学習内容を深く理解することができると考えられる。

②発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができる。（対応設問3（3））

自然の事物・現象に影響を与えると考えられる要因を予想し、その要因を変える条件と変えない条件に区別しながら、予想や仮説を基に解決するための実験の方法を計画することは大切である。指導にあたっては、予想や仮説を基に、実験に関する全ての条件を明確にした上で、どの条件を変える必要があるかを検討したり、他の条件は全て同じになっているかを確認したりすることが大切である。例えば、本設問のように、実験に関する条件が多いとき、温度を変えることを意図していても、結果として日光と温度の2つの条件が異なる実験方法になっていることがある。図や表などに整理したり、実験前に計画を見直したりして、検証したい条件のみが変わっているかを確認する学習活動が考えられる。

(4) 中学校国語

①相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫する(対応設問2二)

相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫する際には、うなずきや表情などの聞き手の反応から、話の受け止め方や理解の状況を捉えることが大切である。自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫するには、聞き手の興味・関心、情報量などを考慮しながら、聞き手に応じた語句を選択したり、話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方、言葉遣いなどに注意したりするなどして、相手に分かりやすく伝わるように表現を工夫することが重要である。例えば、問いかけに対して聞き手がどのように反応するかを予想して、聞き手の反応に応じて話すための準備をする学習活動が考えられる。その際、聞き手の反応に応じて、補足の情報を加えて詳しく説明したり、話の一部を省略したりするなど、複数の伝え方を想定したメモを作成することなどが考えられる。その上で、聞き手の反応を見ながら話して、自分が準備した工夫が有効であったか確かめることも大切である。

②書く内容の中心が明確になるように、内容のまとまりを意識して文章の構成や展開を考えることができる。(対応設問1三)

案内文など実用的な文章を書く際には、項目ごとの内容のまとまりに、文章全体の中でどのような役割をもたせるかを明確にすることが必要である。その上で、集めた材料を比較、分類、関係付けなどして整理し、情報と情報との関係を見いだして、それぞれの情報を文章全体のどこに位置付けることが適切であるかなど、文章の構成や展開を考えながら書くことが大切である。例えば、案内文に必要な項目を立て、それぞれの情報をどの項目に入れ、どのような順序で示すかなど、意図を明確にして文章の構成や展開を考える学習が考えられる。その際、本問で選択肢として示したもののよう、文章の構成や展開の意図として考えられるものを生徒に示しながら考えさせることも効果的である。

(5) 中学校数学

①素数の意味を理解している。(対応設問1)

整数の性質について考察する場面において、整数を様々な視点で分類し、1より大きい自然数のうち、1とその数自身以外には約数をもたない数の集合が素数であることを理解できるように指導することが大切である。

授業を行う際には、1から9までの自然数について、それぞれの約数を求め、1とその数以外に約数があるかどうかに着目して分類する活動を取り入れることが考えられる。このような活動を通して、1より大きい自然数のうち、1とその数自身以外には約数をもたない数を素数ということを理解できるようにすることが大切である。また、「1は素数に含まれる」と考える生徒もいることから、その後の学習において素数を用いる際に、1は素数に含まれないことを再確認する場面を設定することも大切である。

②相対度数の意味を理解している。(対応設問5)

ある階級の度数の総度数に対する割合を求めて、データの特徴を読み取る活動を通して、相対度数の必要性と意味を理解できるように指導することが大切である。本問を使って授業を行う際には、ある学級の生徒40人のハンドボール投げの記録について、小学校で学習したことを基に「各階級における生徒数の、学級の全生徒数に対する割合」を求め、データの分布の傾向を考察する場面を設定することが考えられる。その際、例えば、記録が20m以上25m未満の生徒の割合である0.25は、20m以上25m未満の階級の相対度数であり、相対度数は、全体(総度数)に対する部分(各階級の度数)の割合を示す値であることを理解できるようにすることが大切である。また、大きさの異なる二つ以上の集団のデータの傾向を比較する活動を取り入れることで、相対度数を用いることの必要性を理解できるようにすることも大切である。

③事柄が常に成り立つとは限らないことを説明する場面において、反例をあげることができる。(対応設問6(1))

命題や事柄が常に成り立つとは限らないことを示すには、反例を一つあげて、それを根拠として説明できるように指導することが大切である。

授業を行う際には、「連続する2つの3の倍数の和は、いつでも9の倍数になる」と予想した事柄が成り立つかどうかを調べる場面を設定することが考えられる。具体的には、まず、3の倍数を順に3、6、9、12、…のように並べたとき、連続する2つの3の倍数は隣り合う2つの数であることを確認することが大切である。その上で、連続する2つの3の倍数の和をいくつか調べる活動を取り入れ、9の倍数にならない場合があることを理解できるようにすることが考えられる。さらに、予想した事柄が常に成り立つとは限らないことを反例を用いて説明できるようにすることが考えられる。

(調べたこと)	
連続する2つの3の倍数の和	→ その和は9の倍数になる
例1 $3+6=9$	→ ○ ($9=9\times 1$)
例2 $6+9=15$	→ × (9の倍数にならない)
(説明)	
連続する2つの3の倍数が、例えば6、9のとき、 $6+9$ を計算すると、和は15となり、9の倍数ではない。	
したがって、「連続する2つの3の倍数の和は、いつでも9の倍数になる」という予想は成り立たない。	

また、次のような誤った説明を取り上げることなどを通して、反例は命題の仮定を満たしているが、結論を満たしていない例であることを理解できるように指導することが大切である。

(誤った説明例) 3と9の場合、 $3 + 9 = 12$ になるから9の倍数にならない。
 ↑
 連続する2つの3の倍数という仮定を満たしていないから反例とはいえない

なお、第2学年の用語として示されている「反例」を取り扱う前の段階においても、ある命題や事柄について、仮定を満たしているが結論を満たしていない例を一つ示せば、その命題や事柄が常に成り立つとは限らないことが説明できることを理解できるように指導することも大切である。

③ 統合的・発展的に考え、条件を変えた場合について、証明を評価・改善することができる。
 (対応設問9(2))

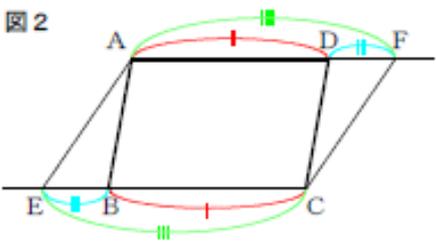
証明したことを基に、条件を変えた場合の証明について考察する場面を設定し、条件を変えても変わらない関係や、条件を変えると変わる関係を見だし、元の証明を評価・改善することを通して、条件を変えた場合の証明ができるように指導することが大切である。

この設問9を例に挙げると、証明1と図2を関連付けて読み、証明1の①から⑤の中で変わらない関係と変わる関係について確認する活動を取り入れることが考えられる。例えば、②「 $AD = BC$ 」、③「 $DF = BE$ 」は図2においても変わらない関係であることのように、書き直す必要がない部分があることを確かめることが大切である。

さらに、証明1では、④「 $AD - DF = BC - BE$ 」であることを根拠に⑤「 $AF = EC$ 」を示しているが、④の関係を示す長さの辺が図2にはないことに気付けるようにすることが大切である。その上で、④以降の証明をどのように書き直せばよいかを検討する活動を取り入れることが考えられる。その際、図2において、④を「 $AD + DF = BC + BE$ 」に書き直す必要があるが、⑤は書き直す必要がないと判断するなどして、条件を変えた場合の証明ができるように指導することが大切である。

証明1

平行四辺形の向かい合う辺は平行だから、
 $AD \parallel BC$
 よって、 $AF \parallel EC$ ……①
 平行四辺形の向かい合う辺は等しいから、
 $AD = BC$ ……②
 仮定より、
 $DF = BE$ ……③
 ②、③より、
 $AD - DF = BC - BE$ ……④
 ④より、
 $AF = EC$ ……⑤
 ①、⑤より、
 1組の向かい合う辺が平行でその長さが等しいから、
 四角形AECFは平行四辺形である。



(6) 中学校理科

①身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定できる。

(対応設問 1 (2))

見通しをもって科学的に探究をするためには、疑問や見いだした問題から解決するための課題を設定することが大切である。

指導に当たっては、身の回りの事象から生じた疑問や問題が解決可能かどうかに着目し、科学的な探究の課題を自分の言葉で表現する学習場面を設定することが考えられる。その際、生徒が疑問や問題から自分の言葉で課題を表現し、見通しをもって探究できるようにするために、「課題の把握」の段階で生徒が疑問や問題を見いだしやすい自然の事物・現象を提示することが重要である。

5 結果を踏まえた取組の重点

(1) 校内研修の充実

伊勢市では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、すべての学校において「わかる授業」の実施を目指し取り組んでいます。

各校の校内研修では、学習指導要領に示されている資質・能力を育むため、「指導と評価の一体化」について研修を深めるとともに、見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動の研修を進めています。また、県の事業である「わかる授業」推進事業、若手教員等の育成を核とした授業力向上の取組推進事業の推進校での実践を進めるとともに、推進校での取組を他校へも還流し授業改善に生かしています。

目標基準準拠検査（CRT）と WEB-QU（よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート）を実施・活用し、よりよい集団づくりと授業改善の取組を充実させています。

これらの取組を充実させるため、指導主事を各学校に派遣し、各校の課題に応じた指導・支援を行っています。

(2) 令和7年度全国学力・学習状況調査等の結果の活用

令和7年度全国学力・学習状況調査や CRT 等の結果を踏まえ、学校訪問等により学力向上の取組について各学校と情報共有を行い、子どもたちの確かな学力の定着を図っています。

また、全国学力・学習状況調査や CRT 等の学力調査を用いた分析の仕方や、授業への生かし方について、研修会を行っています。

(3) 学力向上推進事業における「読解力向上プロジェクト」の推進とその成果の普及

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果からも課題が見られた、「複数の情報を整理して自分の考えをまとめたり、書き表し方を工夫したりすること」の力をつけるために、読売新聞社の「よむ YOMU ワークシート」を活用し、単一の情報のみに基づくのではなく、複数の情報を比較したり、関連付けたりして検討する力をはじめとした読解力の向上を図ります。今年度は市内小学校5校をモデル校として指定し、その取組の効果や内容について他校にも情報共有していきます。

(4) ICT 機器を活用した授業改善と読書活動の推進

伊勢市では、日常的に授業の様々な場面で、タブレット端末等 ICT 機器が活用されています。「主体的・対話的で深い学び」の実現のため、タブレット端末等 ICT 機器を効果的に活用し、「個別最適な学び」、「協働的な学び」を一体的に進め、授業改善につなげていきます。

また、教育メディア課と協力し、各校での読書活動の推進や情報活用能力の育成を進めています。

(5) 家庭・地域等との連携

各学校で、家庭学習の手引きや学校便り等を通じて、令和7年度全国学力・学習状況調査等の結果を説明することで、子どもたちの生活習慣・学習習慣・読書習慣等の現状を家庭や地域へ発信しています。

研修会や学校訪問をとおして、各学校に家庭学習を充実させるための声掛けをしていきます。また、タブレット端末に導入されているドリルソフトを使った学習や三重県教育委員会作成の

ワークシート等の活用を進め、家庭学習の改善を図っています。

<参考文献>

- ・令和7年度全国学力・学習状況調査報告書（小学校国語）
- ・令和7年度全国学力・学習状況調査報告書（小学校算数）
- ・令和7年度全国学力・学習状況調査報告書（小学校理科）
- ・令和7年度全国学力・学習状況調査報告書（中学校国語）
- ・令和7年度全国学力・学習状況調査報告書（中学校数学）
- ・令和7年度全国学力・学習状況調査報告書（中学校理科）
- ・令和7年度全国学力・学習状況調査報告書（質問紙調査）